

さいたま市立大砂土中学校 学校だより



～キーワードは「笑利」と「求利」!～

さいたま市立大砂土中学校

さいたま市見沼区東大宮1丁目100-1

TFI・048-684-8004

第3号

令和8年6月8日発行

サーカスの馬

校長 越智 宏明

6月になり、市内の各会場で学校総合体育大会のさいたま市予選会が行われています。3年生にとっては、これが最後の大会。後悔のないよう、自分を信じ、仲間を信じ、これまで積み重ねてきた努力を信じ、最後の最後まで全力を尽くしてほしいと願っています。

そんな生徒たちを応援しようと、教頭先生と手分けして、市内の会場をかけずり回っているのですが、大砂土中学校の生徒たちは、どの会場へ行ってもすぐに見つけることができます。遠くから「校長先生～!!」と、大きな声で呼んでくれるのですから。会場で生徒たちとハイタッチを交わしたり、一緒に円陣を組んで声出しをしたりしているうちに、自分も生徒たちと一緒にコートやフィールドに立っている気持ちになり、いつの間にか全力で応援していることに気がきました。

もちろん、勝負ごとですから、勝って県大会に進む部もあれば、敗れて涙する部もあります。しかし、生徒の皆さんには、大会会場で仲間と一緒に見た風景を忘れずに覚えてほしいと思います。特に3年生は、この景色を眼の奥に焼き付けて、次のステージに向けて力強く歩を進めてください。

毎日校長室に遊びに来る生徒たちも、それぞれの会場で全力のプレーを魅せてくれました。学校生活では、どちらかと言えば、無口でおとなしいと私が勝手に思っていた生徒が力強いシュートを次々決めたり、強烈なバッティングを披露したり、果敢に次の塁を狙ったりと、いきいきと輝いていました。そのような生徒たちの闘志あふれるプレーを見るにつけ、改めて生徒個々の可能性は無限であり、その輝きに気付かせることこそが我々教員の使命なのだろうと感じた次第です。

安岡章太郎に「サーカスの馬」という短編小説があります。なんの取柄もないと感じている中学生「僕」は、何事にも本気になることができず、「まあいいや、どうだって」と投げやりな気持ちで日々を過ごしていました。そんなある日、「僕」は、神社のお祭りで催されたサーカスのテントの陰に、一匹の赤茶色の馬が繋がれているのを眼にします。その馬は、見るからに年老いていて、痩せていて、貧相な姿をしていました。「僕」はこの馬が自分と同じだと理解しました。おそらく何の芸も出来ず、なまけてばかりだったから、こうして人目に付かないところに繋がれているのだろうと…。しかし、サーカスの行われた当日、「僕」が目にしたのは、サーカスの花形としてダンスを踊ったり駆けまわったり、火の輪をくぐり抜けたりする、あ貧相な老馬だったのです。

「僕は、我に返って一生懸命手をたたいている自分に気がついた。」という一文で終わるこの作品、「僕」が「一生懸命手をたたいて」いたのは、老馬の華麗な演技に魅了されたからだけではなく、自分と同じ「何の取柄もない」と思った老馬が、実はサーカスの花形だったことを知ったことで、自分自身にもまだ、輝けるものがあるはずだと気が付いたからに他なりません。「まあいいや、どうだって」と、何事にも投げやりだった自分が消えていくことを象徴している印象的な場面です。

その人の可能性を見出すのも評価するのも、他ならぬ自分自身です。一生に一度の人生、自分が自分を信じられずにどうするのか。大砂土中の生徒たちが、それぞれの大会会場で純粋にひたむきに頑張っている姿を見て、この安岡章太郎の小説が思い起こされました。部活動の地域移行など、子どもたちを取り巻く環境は大きく変わりつつありますが、自分の可能性を追い求める姿勢だけはもち続けてほしいと思います。



部活動壮行会で力強く誓いの言葉を述べた各部の部長たち!